

甲南大学 総合研究所 所報

甲南大学総合研究所

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

電話 (078)435-2754(ダイヤルイン)

第 68 回 総合研究所公開講演会

「神戸と三陸を結ぶ復興ネットワーク」

基調講演：東北の復興と活力あるネットワークづくり-空間経済学の視点から-

講 師 藤田 昌久 (甲南大学 特別客員教授)

対 談：人口減少下の持続可能な復興支援とは

講 師 藤田 昌久 (甲南大学 特別客員教授)

松田 朗 (岡本商店街振興組合 理事長) 氏

対談司会 稲田 義久 (総合研究所長)

2018年9月22日(土)開催



○稲田所長 皆さん、こんにちは。7月7日の七夕に本講演会を予定していましたが、大雨の影響で2カ月延期となりました。皆様にはご迷惑をおかけしました。その間に、先生方は講演内容をさらにブラッシュアップされて、より魅力的な内容になっていると思います。

昨今、自然災害などに対して、いろいろなボランティアの方が現地で頑張っておられます。恐らく、阪神・淡路大震災、それから東日本大震災を経験して定着していったものと思います。

今回の我々の講演会は延期になりましたが、気象変動も一要因として考えられます。災害が激化、かつ高頻度化しつつあります。一方で長期の傾向として人口が減少し始めております。ある意味で復興の対応の仕方に余裕がなくなりつつあるというのが現状でございます。

このような状況下、災害からの復興を活力あるものとするために何が必要か、これが本日の講演の眼目でございます。皆様のお手元のチラシに示されているように、今日は、甲南大学の特別客員教授藤田昌久先生、そして岡本商店街振興会の松田朗理事長をお招きしての講演会です。

本講演も今日を迎えるまでに、最近の9月4日の台風21号、2日後の北海道の胆振東部地震や長雨等がございまして、いわば災害頻発国日本で、被災からどのように立ち直ることができるのかが海外からも注目されております。本日の藤田先生の講演や松田理事長のお話に加えて、私がまとめました「台風21号の関西経済への影響分析資料」を一部お配りしておりますので、ご参照していただければいいと思います。

それでは、藤田先生、よろしく申し上げます。

○藤田教授 皆様、こんにちは。甲南大学の藤田でございます。

先ほど、稲田先生から説明がありましたけど、この講演会というのは本来7月7日の夏休み前に開催する予定でしたが、西日本豪雨によりまして、今日に伸びてしまいました。

最近、自然災害が多様な気がしまして、皆様の中には、日本列島は将来大丈夫かなと心配されている方もあるかもしれません。しかし、気象学や地震学の専門家に言わせると、そういう自然災害というのは、日本列島の置かれている自然的、地学的な条件から、これは起こるのは仕

方がなくて、確率的に起こるのだと聞いております。私もそれで納得しているわけではありませんが、重要なことは、そういうふうに確率的に起こりますさまざまな自然災害が実際に起こったときに、いかに人命を救い、被害を小さくし、この望ましい復旧・復興を迅速に達成していくかということだと思っております。そのためには、今までのいろいろな災害から、未来のために学んでおくということが重要だと思っております。

本日の講演会では、最近の大きな災害の中でも、1995年の阪神・淡路大震災および2011年の東日本大震災の2つに焦点を当て、この2つの大きな災害から、未来に向けて我々は何を学び、何を伝えていくべきかということを経験の皆様方と一緒に検討していきたいと思っております。

また、今までの災害で多くの方が亡くなりましたが、今日の学びの場を通じまして、その方々の冥福も祈らせていただこうと思っておりますので、皆様、よろしくお願いたします。

それでは、今日のテーマ「神戸と三陸を結ぶ復興ネットワーク」の趣旨を、この3枚の写真で説明させていただきます。右にありますのは気仙沼のポスターです。2011年3月に大きな被災を受けた気仙沼市は、どのようにして復興していくかを町が一体となって考えました。このメッセージは、みんなの考え方の創出で、海と生きるということを中心とし、この関連のもとに、古い気仙沼を復興していくんだということ、海と生きるということの関連を錦絵にしたのがこの写真です。この錦絵にありますように、気仙沼、三陸海岸の非常に豊富な海の幸を活用しながら、後ろの太平洋から勢いよく上っております朝日とともに、この真ん中に宝船に乗っております、ホヤぼーや（気仙沼市観光キャラクター）に導かれ、復興をなし遂げようという錦絵であります。それから、左側の写真は、阪神・淡路大震災におきまして、神戸の復興に灯をともしてくれました神戸ルミナリエでございます。この神戸と三陸、この被災地を結びます復興ネットワークで、中心的な役割のひとつを果たしてくれましたのが、この真ん中にあります岡本商店街の復興支援アンテナショップの「気仙沼ただいん」です。この「気仙沼ただいん」につきましては、後ほどすぐに、岡本商店街の振興会理事長の松田さんから詳しい話をさせていただく予定です。

本日の予定といたしまして、私が、この東北の復興と活力あるネットワ

ークづくりを空間経済学の視点から、東北大震災に焦点を当てて、今、どういう復興の状態にあるかや、将来の展望についてお話させていただこうと思います。その後すぐ対談で、我々3人で人口減少下の持続的な支援とはいかにあるべきかということをお話させていただきたいと思います。

それでは、私の講演に移ります。実は私、今年の2月に日本経済新聞社より、「復興の空間経済学 人口減少時代の地域再生」という本を出しました。これが本の表紙でして、この表紙を少し見ていただきたいのですが、これは被災が最も大きかった町の一つである陸前高田市ですが、手前の高台、これはもともと120メートルの山を40メートルまで削りまして、ここに高台団地を作ろうとしているところです。真ん中を走っているのが気仙川で、この向こう側に大きな震災を受け浸水した高田地区があり、ここに、この山を崩して出た大量の土を運びまして、この12メートルまでかさ上げした状態であります。この本は2018年の2月に出版し、写真はその1年半前に撮っています。この写真からわかりますように、大きな被災を受けました東日本の三陸海岸の被災地の状況は大体こういう状態です。こういうハードなインフラや地盤づくりが終わったところで、本当に活力ある、みんなが住めて、雇用があって、にぎわいのある町をつくっていくのは今からだといいことでもあります。この本は神戸大学の浜口先生、佐賀大学の亀山先生と3人で書きましたが、東海岸の三陸町を中心とした復興の様子を皆様にお伝えすると同時に、我々の将来、また、いろいろな日本で起こり得る災害に対する準備と復興ということについて書いたものです。本は、7章と補論からなっておりますが、きょうは、時間がありませんので、「第3章 写真とデータで見る東日本大震災からの復興の歩み」、「第4章 被災地における人口減少と創造的復興」、「第5章 自然資源に基づく復興」に集中してお話をさせていただきます。

まず、写真とデータで見る東日本大震災からの復興の歩みということで、ご存じのように、2011年3月11日に太平洋の仙台の沖合130キロの東のほうで、マグニチュード9.7という日本記録では最大の規模の地震が起こり、約1時間後に、日本の東海岸600キロにわたりまして、約20メートルの津波が襲ってまいりました。この写真は岩沼市の写真で、右側に仙台空港がありますが、ここもすぐに冠水いたしました。我々は、こ

の映像も含め、震災直後、この驚愕的な映像をいろいろなマスコミで知ったわけですが、我々は、こういうマスコミで知るだけでなしに、自分の目で確かめ、現地の皆さんと話をしてみたいということで、この遠くの被災地を我々3人で、現在までに合計8回の被災地視察をしまいいりました。第1回の2011年の4月から第8回の今年の5月末まで、3人で一緒に行きましたし、それぞれ単独でも何回も行っております。我々は主に、宮古から福島県のいわき市まで25の町に行きましたが、今日は時間がありませんので、主に三陸海岸で大きく被災しました3つの町、すなわち、宮城県の北のほうにあります南三陸町、それから、宮城県と岩手県の県境沿いにあります気仙沼、それから岩手県の陸前高田、この3つに焦点を当てまして、いわゆる我々が定点観測を、同じところに行って、同じ方向で写真を撮って、復興状況を調べました。この3つを手短かに報告させていただこうと思います。

まず、最初の現場として、宮城県の南三陸町、人口約1万8,000人の町で、死亡と行方不明合わせて約1,000人です。住宅の全壊が3,880軒です。津波の高さは実に16メートル近く、地盤沈下が70センチということであります。これは、復興前の志津川地区の非常にきれいな町の写真です。この志津川湾の養殖を中心とした漁業、それから観光の町ですが、これが津波により、一瞬にして、ほとんど壊滅してしまいました。実際、これは、この左側の図を見てもらいますと、ヒトデのように、赤の枠で書いてあるのは住宅地でしたが、赤で塗られているのが、住宅地のほとんどが完全に破壊されてなくなったということです。これにより、このときの津波の破壊力はいかにすごかったということがわかると思います。

それから、その後に、我々が最初に行きましたのが4月30日ですけど、これは、手前の町の西のある高台、16メートルの上山という高台から志津川湾に向けまして町の様子を撮りましたが、ここで見てもらったらわかるように、住宅、商店もほとんど完全になくなって、幾つか鉄骨の枠組みが残っているという状態です。これを、約2年半後に行き、同じ方向に写真を撮ったのがこれです。これは、もう、がれきとか建物の壊れたのも完全に撤去されまして、更地のようになっていますが、ただ、地盤沈下していますから、浸水してまいますし、夏草が覆っています。こういう形で、

これをさらに2年半後、当時は2015年9月1日に行きますと、同じ方向で写真を撮りましたが、全く違った状況であります。要するに、見渡す限り盛り土となって、海も見えなくなっているということです。これを、さらに、今年の5月に写真です。同じところに、今度は舗装され、道路ができて、町の区画整理が終わった段階です。ただ、町といいましても、手前の小さなコンビニができただけで、本当に町ができるのは、今からという状況です。

以上が南三陸町ですが、次に2つ目の現場の、気仙沼市に行きますと、人口約70,000人、死亡、行方不明で約1,500人、津波の高さが大体8メートル、それから地盤沈下が74センチということです。皆さんご存じのように、気仙沼市というのは、こういう三陸海岸を代表する特定の漁港で、この遠洋漁業、沖合漁業の拠点でしたが、漁港だけでなく、水産業プラスターという造船所とか、加工工場とか、市場とか、あらゆるいろいろな活動が集積しているところでした。また、いろいろな海産物を食べさせてくれるグルメの町の観光地でもあります。震災で大きな被災を受けましたけど、特に大きかったのは、漁船の重油が湾いっぱい流れて、それに全部燃え上がり、そこにいた船は全部燃えてしまいました。これは、手前はカツオ船が焼けただけだと思えますけど、手前の波止場も完全に壊れています。気仙沼は5月30日に、今度は新しく復旧した魚市場から撮りましたが、見ていただいたらわかりますように、大きなマグロ船とかカツオ船が、もう帰ってきております。こういう形で港はほぼ復旧、復興しております。ただ、産業クラスターのうち、いろいろな重要な産業、加工工業の工場は、まだ今からだということです。加工工場が集積していたところの写真を5月2日に撮りましたが、手前の気仙沼湾の一番奥まったところに加工工場が集まっており、一番下が被害が大きかったところですが、住宅も加工工場もほとんど完全になくなっています。ただ、大きな300トンの船が1キロのところに来ています。それから、これは1年後の写真ですが、もう、瓦れきが完全にきれいになくなって、船だけが残っております。それから、さらに今度は2016年12月の写真ですが、今度はその埋め立てが終わっております。手前にコンビニができ、右に復興住宅もあります。最新の映像で5月29日、この奥のほうに住宅が建ち

始めておりますけど、手前の加工工場ができるところは、まだ更地に近いと大体こういう状態です。

それから、最後に3つ目の現場といたしまして、陸前高田、人口23,000人、死亡と行方不明で2,400人ぐらい、津波の高さが実に15メートル、地盤沈下が実に84センチということで、大きな被災を受けました。被災、震災直後の陸前高田市の町の全景ですが、港は完全に破壊されております。我々が5月2日に行って撮りました防潮堤の写真ですが、長さ3キロ、4キロにわたる10メートルの防潮堤が完全に破壊されています。それから、有名な高田松原、江戸時代にできました何千本というきれいな松原が有名でしたが、これが震災によって防潮堤とともに完全に破壊され、皆さんご存じのように、1本だけ奇跡的に残り、奇跡の1本松と言われております。これをもう少し定点観測で見えますと、これは5月2日に、我々が行きました陸前高田市の奥の、かなり手前の山のほうからの写真ですが、見渡す限り何もなくなって、完全に津波にさらわれている状況です。少し高台のほうの住宅地、商業地に行きますと、少しの瓦れきは残っていますが、完全に、破壊されています。唯一残っているのは、「マイヤー」というこの地域ローカルのスーパーマーケットが1つ、手前に端午の節句で鯉のぼりの青や緑が残ってますが、非常に痛々しい写真です。それから、これは2015年8月31日に手前の山を崩して、この土を運ぶという大土木工事ですが、120メートルあるのを、40メートルまで崩して、この大量に出た東京ドーム10杯分の土をベルトコンベヤーで川を超えて運び、埋め立てているところの図であります。私、この大土木工事を見まして、実は、日本というのは、いざとなったらすごい土木力があるのだなと思って感心しました。少し余談になりますが、私はもともと京都大学の土木を卒業しています。もともと土木に行きましたのは、こういう大きな土木工事に携わりたいということで行ったわけですが、どういうわけが経済学者になってしまいました。

冗談はさておきまして、今、陸前高田の、実はこの本の表紙のもとの写真ですが、2016年の状況は、実際に山を崩して、高台が整備されて、向こう側は埋め立てが終わった状況で、町が本当にできてくるのは今からという状況、スタート地点ということでもあります。これはほかの町でも大

体同じですが、最新の映像では、同じ地点を同じ方向から2018年5月29日に撮りましたが、上の写真と下の写真を比べてみると、一つ大きく変わっているのは、手前の高台に新しい住宅がたくさん建っているということで、すばらしい復興ですね。それで、右側は新しい小学校ができているところです。こういうふうに新しい復興が始まりかけているということです。ただ、奥地の高田地区の本当に中心街のかさ上げしたところはほとんど何もなくて、今からというところです。ただ、一つだけ申し上げたいのは、この奇跡の1本松ですが、この奥のほうに、楢円で囲みましたところに復興のにぎわいの拠点センターができつつあります。

ちょっと申し遅れましたが、上の写真右側に奇跡の1本松と気仙川の左側に大きな虹が出ていますね。よく見てもらったら、二重の虹ですが、こういうこと言ったら怒られますけど、こういう1本松と二重の虹を同時に撮るのはなかなかこれは難しいというので表紙に使わせていただきました。

そういうことで、3つの場所を見ましたが、東日本大震災によりまして、ほかの20も30もあります町の復興の状態というのは大体同じで、ハードな地盤をつくり上げる防潮堤という部分が終わって、今から本当に人が住み、雇用があり、学校、病院もあり、こういうショッピングセンターもあり、本当に住んで楽しい町というのができるのは、今からの課題です。

ここで一つ申し上げておきたいのは、今から、本当に活力あるまちづくりをしていかなきゃいけないのですが、これは、決して楽観を許さないということです。非常に大きな困難が横たわっているかもしれないということです。なぜ復興が難しいか。例えば、神戸のときと違って、どういうふうに今までと違って難しいかということ、これを今から起こります大震災によります復興も、それは決して容易ではないということでもあります。

その理由を説明しますに、復興の空間経済学の目的は何かということをもう一回説明させていただきたいと思います。この本の目的は何か。実は、2つの目的があり、二兎を追うと言っておりますけど、1つの目的は東日本大震災、これも含めまして、将来も起こり得る大規模災害からの復興をいかにしていくかということです。先ほど、稲田先生もおっしゃいましたように、日本は自然地学的な特性から、地震、津波、台風、火山を伴います大規模な自然災害、いつでもどこでも繰り返し起こり得る、これは我々

そういうところに住まわせていただいているわけで、これはこれで受け入れるということですが、この最近30年間におきましても、ここに書いておりますが、赤で書いてあるのだけでも95年の阪神・淡路大震災、2011の東日本大震災、それから、稲田先生が先ほど言われましたように、今年の最近だけでも、6月の大阪北部地震、7月の西日本豪雨、地震、9月4日の台風21号、そしたら、今度は9月6日の北海道東部地震ということで、引き続き起こっております。

それから、重要なのは、将来にもっと大規模な大災害が予想されているということです。マグニチュード7クラスの首都直下型地震、それから、マグニチュード8から9クラスの南海トラフ巨大地震、これはいずれも政府の発表のデータですが、マグニチュード8.8以上の北海道沖の千島海溝、超巨大な地震、こういうのが非常に高い確率で予測されています。例えば、このマグニチュード8から9の南海トラフ地震は、30年以内に起こる確率が70から80%という非常に高い確率です。実際、もしも南海トラフが起こりますと、これはもう東日本大震災の10倍ぐらいの被害を受けますので、我々は本当に国を挙げて、この復興に対して準備をしていく必要、備える必要はあると思います。

それから、もう一つ念を押していきたいと思うのは、この前は自分のところで起こったから当分起きないだろうという、そういうことはないということです。例えば、同一地域で、日本では繰り返しいろいろな大きな災害が起こり得るということでもあります。これは、例えば、三陸海岸をとりますと、明治に入りまして大体50年おきに4回の大きな津波が襲ってきています。

一つだけ、実際にいろいろな災害は繰り返し起こり得るということの一つの例として、皆さん、ここの会場に来られる前に、甲南大学の本部を歩いていらっしゃったかと思いますが、1923年に甲南大学の前身の高校がつくられたときのものですが、現在のものは1995年の大震災で壊れ、復元したものです。甲南大学のキャンパスが大きく壊れたのはこのときだけかと言うと、実は38年の阪神大水害のときも大きく被害を受けました。この大水害で、この近くを流れております住吉川が氾濫しまして土砂災害でキャンパスが完全に埋まりました。そのときの、この復興に際して、そ

のときの校長、甲南大学の創設者である平生鈞三郎先生がおっしゃったことが「常ニ備ヘヨ」であり、石碑に刻まれております。これは、天の災いを試練と受けとめて、常に備えて悠久の自然とともに生き、輝ける未来を築いていこうということです。自然災害は確率的に起こるので、これは避けようがない、これを試練と受けとめて、そういう自然と一緒に生きていこうと、この気仙沼の海と生きるということの関連と同じことでもあります。

この本のもう一つの目的は、日本経済社会が活力あって初めて被災地の真の復興ができるわけで、例えば、私が若いときは転んで腕を折りましても、3カ月もたてば治りますが、今ここで転んで骨折すると、恐らくそのまま衰弱してしまいます。元への復活力を持つのは、日本全体が活力を持っていかなきゃいけない。そういうわけで2つ目の目的は、日本の経済社会全体の復興とそれを支えるまちづくりを、東京一極集中と地方の過疎化、これをどういうふう理解して、どのように評価して、もっと均衡のとれた国土をどういうふうにつくって行って、日本全体として経済社会を発展をさせていくかという2つの目的を日本がこれまでに経験したことのない大きな挑戦として立ち向かわななきゃいけないということでもあります。この挑戦というのが急激な人口減少と超高齢社会の進行です。この2つの挑戦に、どういうふう創造的に応戦していくかと、我々の考えを記したのがこの本です。

人口減少というのは、若い人に頑張ってもらって子供をたくさん産んでもらったら、そんなに減らなくて済むのではないかと思われるかもしれませんが、決してそんなに甘くはありません。この人口状態というのは非常に予測が易しいというか、ほとんど確実に起こることで、日本の人口の推移は、もう縄文時代からであったと思いますけど、これは奈良時代からですが、一方的にどんどんどんどん増えて、長期的に増えてきたわけですが、それが2008年から人口減少がスタートし、去年は大体40万人ぐらいしか生まれず、もうすぐ100万単位で急激に落ちていきます。これはほとんど避けられません。なぜかといいますと、人口が何人減るかというのは、生まれた者と死亡する者の差ですからね。これはこの人口の状態、人口がどういうふう何人生まれたかというのが青い図であり、第一ベビーブーム、第二ベビーブームで猛烈に生まれまして、その後、急激に産児

制限を通じ、生まれるのがずっと減って、特に出生率というのが非常に落ち、結局、このベビーブームの人は若かったわけですけど、今は私も同じですけど、大体高齢化し後期高齢に近づいてきます。そうしますと、私も含めて、こう言ったら怒られますけど、10年、20年で亡くなるのが自然で、赤で書かれておりますのが予測されている死亡数であります。若い人が一機に生まれたのが、今、高齢化し確実にほとんどもうすぐたくさんの方が亡くなります。しかし、若い人が生まれないと、この差が大体大きく100万単位で続きます。だから避けようがありません。これを一つ念頭に置かないといけないということです。

もう一つは高齢化です。これは、戦後すぐの平均寿命は、大体男性50歳、女性54歳ぐらいでしたが、今はもう90ぐらいまで生きます。だから、もう大体40%の高齢化ということが1970年には予想されておりました。それで、こういうことを考えますと、人口増大時における被災地の復興というのは、これはある意味でほっといても自然と起こります。これは、1930年の昭和三陸地震で大きな被災を受けました東北の三陸海岸ですが、そのときの状況を山口弥一郎さんが1943年に本にし、ということが書いてあります。「被災地の津波後の復興は目覚ましく、たちどころに失われた戸数、人口の満たされてしまう状態にある」とあり、日本中で人口がどんどん増えています。また、食料、魚に対する需要もどんどん増え、新しい人が来て、新しい漁業も発展していくということでもあります。しかし、今からはそうはいかないということです。今からは人口が急激に減少していきます。人口が増えているということは、日本全体が大きくなっている、いわゆる規模の経済というものをてこにして発展することができるわけでした、それができない。では、規模にかわるものとして、何をてこにして発展するかということで、我々が提唱しているのは、この日本の経済社会のあらゆる側面において多様性を促進し、日本の経済社会や地域を発展させていこうということです。特に、今日のテーマとしまして、多様性に富んだ国土システムを発展させていこうというもので、東京一極集中の結果として過疎地ということではなく、もっとバランスのとれた、多様性に富んだ、この国土システムをつくり上げていこうということです。

空間経済学の理論を背景としてごくごく簡単に説明させていただきます。空間経済学というものを初めて聞かれたかもしれませんが、従来の都市経済学、地域経済学、国際貿易理論はそれぞればらばらに発展しましたが、グローバル化し国境がなくなった現在ではそれでは通用しないため、集積のミクロ理論を中心として、今までの個別の理論から空間経済学理論という統一した理論をつくりました。要するに、国土全体を、日本、または世界全体の空間の一つの動的なシステムを捉えていくということです。そのときの基本的な考え方として、今の日本の空間構造というのは、例えば東京とか神戸に集めようとする力と、兵庫県の奥や島根県にいろいろな活動を分散させようという、この2つの力のせめぎ合いで、自然と空間構造ができ上がり、これが典型的な核と周辺構造になり、これがいろいろな条件のもとに不安定化し、また起こって自己組織化するという考え方です。農業とか漁業とかは分散してやる以外にないわけで、分散力というのは比較的説明しやすいです。重要なのは、地域の競争優位を産む集積力をどのようにして理論的に説明していくかです。神戸市が発展したのは、あそこに深い港があったという交通上のネットワークの利点もありました。しかし、その後、2万人の町がどんどん今も成長して160万人になっているのは、神戸市に人や企業が集まることによって、いわゆるポジティブ・フィードバックが起こって、それで中心的になります。さらに集まったことでますます魅力が増して、もっと集まってくる。そして多様性が増していきます。多様性がどうして、この集積力にとって重要かということですが、これはいろいろな人材とお店で同じことが言えます。サービスとか人材の能力は多様性があると、これは直接的な競争関係は少ない。それに対して、お互いに補完性が増しまして、結局そういう人、多様性、多様なものが集まると、集積の相乗効果が生まれて、地域全体として生産性が増し、集客力が増し、またイノベーション力が増すということです。

多様性がいかにして集積力を増して、魅力を増していくかということ、少しだけ至近な例で説明させていただきます。私が甲南大学に来ますときにJR摂津本山から岡本商店街を歩いて、いつも歩いてきていますが、この岡本商店街というのは非常に魅力のある商店街だと思います。ネットによりますと、兵庫県で最大の店舗数を誇る商店街と言われており、後で、

松田理事長に確認して行ってほしいのですが、私は、一言でこの魅力を言いますと、多様性の中の統一だということだと思います。これは阪急のほうに行く道ですが、ここは石畳の両側に小さなお店がたくさんあります。右側がかばんの修理屋さんです。左側が服とかアクセサリ、宝石の修理、こういういろいろな高級品の修理というのは小さな町ではなかなかできない、やっぱり全体が大きな需要がある立地であって初めてできるのだと思います。駅のほうに行ってみますと、手前の赤いのは美容室で、その2階にかすかに「アリオリオ」というこのイタリアンレストランの写真が見えます。これが松田理事長の経営されているイタリアンレストランです。おもしろいのは、例えば外からよく見ると何か自転車の車輪が置いてあって、これ倉庫かと思ってしまいます。ところが、これは仕掛けで、この一見ごちゃごちゃしたところでライブをやったりしますと、自分はここに属するということを感じて盛り上がるわけで、これが仕掛け、要するに、がちゃがちゃに見えるけれども、ごちゃごちゃで、要するに、いい言葉で言えば、多様性が非常にいっぱいだということでもあります。これは阪急の駅で、そのそばに私がいつも朝御飯を食べている「ユニーク」という、ユニークな喫茶店があり、ここのハムエッグは絶品ですね。こういうドイツ風の建物で、その右側にドイツ風の斜めの枠を貼った接骨院と、いろいろなものが、要するにごちゃごちゃにあるので、これがいいわけです。これは「安政堂」という和菓子の店です。この安政堂というのは、これは話しますと、これだけで軽く10分かかりますからやめますけど、これは、江戸時代の安政1854年にこの兵庫にできた古い和菓子の店だと思います。それ以来、これが続いているわけで、いろいろなおいしいものがあるわけですが、例えばうぐいす餅というのがあります。岡本というのは梅林があって、今もありますが、3月になれば梅があつていろいろな鳥が来て、うぐいすが鳴いたイメージです。このうぐいす餅を食べたらほっぺが落ちるような感じですよ。それから、もう一つすごいのは、「摂津の里」というロールケーキがあるんですよ。このロールケーキの大きさはフットボールぐらいあって、500グラムは軽くあると思いますよ。これはすごい食べごたえがありまして、余談ですが、私のファンであります横綱の稀勢の里に食べさせると、彼は昨日も白鳳に勝ったんじゃないかと思っています。神戸の「とら

や」さんも含めてこの辺の和菓子というのは、京風です。これは江戸風の和菓子です。この違いは、灘の酒を、魚崎を通じて江戸に運ぶため、非常に江戸との関係があり、食品も江戸から来たということで、ネットワークは非常におもしろいということでもあります。それから、いろいろなかわいい服があらゆるお店にあって、統一感を出していますし、こういうかわいいスクーターと人形を置いたイタリアンレストランもありますし、教会もある。教会が町の中にあるというのもいいですね。託児所もありますし、「アリオリオ」の手前には、復興アンテナショップがあります。この地域を取り上げた本を集めたお店もあります。こういうふうには、300店ぐらいのいろいろ多様なそれぞれの個性が集まっているという町で、多様性の中の統一と、多様性によって魅力を増します。これはショッピングセンターの多様性ですが、人間、人材のイノベーションによって、イノベーションが起こると、多様性で、生産活動の多様性によって生産性が上がる。公共サービスの多様性もあり、これを地域のインフラが魅力を増すと、こういうのが相乗効果で町が大きくなるということです。

ただ、日本全体で人口が減ってきますから、減少過程ではもっとバランスのよい形で地域の多様性を促進していく必要があります。これは新しい経済理論が必要ですが、詳しいのは「復興の空間経済学」「集積の経済学」を読んでいただければいいと思います。

以上をバックにしまして、人口減少のなかで、地盤づくりから始まったこの究極の地域活性化、これが東北被災地の復興ですが、これと同じようなことを今からいろいろな大きな災害が起こったらやらないといけないということです。つまり、地盤が整えられ公共インフラもほぼ整った今、上のほうをつくるということです。生活の場をつくり、産業の場をつくり、雇用の場をつくり、公共サービスをつくるということです。人口は仙台のほうにたくさん移っていますし、東京にも移っていて、7年経ったから、なかなか帰ってきてくれません。スピードが重要ですが、市場経済にまかせていたら、なかなかにぎわいはできてきません。したがって、市場経済を補完する意味で、地域の人々が力を合わせて、自分が先頭に立って地域をよくしていくという、地域コミュニティが活躍することが不可欠です。それで、こういうことでどういうふうにしたら復興をしていく

か、国や他の地域とどういうふうにして連携していくか、自分ももちろん頑張らなきゃいけないけど、お互いに助け合おう、それから、公からどういうふうな援助をするかということ、これが大きな課題であります。

一つの大きな課題は、津波が起こった後、土地をどういうふうになんかに使っていくかということですが、典型的には、防波堤をつくり、その後ろは公園とか緑地にしていく。それから、その後に、産業用地とかにして、高台に住宅を持っていく。同じようですけど、海のそばはもったいないから産業用地にして、高台に住宅にする。同じように海のそばは商業用地にして、高台に住宅を持っていく。こういうようにいろいろなパターンがありますが、基本的には、高台にみんな住宅を持っていく、これは法律的に決まっているわけで、浸水池に住宅をつくることはできないわけですから、一つの大きな問題は、域内交通をどこにするかということでもありますね。先ほどの陸前高田の写真を見てもらうと、手前の山を120メートルから40メートル切って、40メートルのところの高台に住宅をつくられて、これは安全ですが、町の中心ははるかな先です。これとの交通、いろいろな日常、病院、学校へのアクセスをどうするか、これは非常に大きな課題です。これは今からもいろいろなことで起こりますから、考えていかなきゃいけない。だから、いろいろな地域コミュニティー、日本のいろいろなところで工夫されていますが、それをうまく取り入れないといけない。それから、日本でなかなかおくらせておりますシェアライドをもっと導入するとか、究極的には自動運転の自動車を導入するか、新しい試みをどんどんやらなきゃいけないと思います。

もう一つの大きな課題というのは、中心市街地の再生です。町の市街地の中心というのは、その町が100年、200年たち、徐々に大きくなって、真ん中のにぎわいが出ていくわけですから、それが一過に破壊され、今度は、みんなは遠くに住むようになりました。例えば、遠くで仙台まで行った人が、仙台でもかなり奥地に住んでいて、周りに人がいないのに、どうしてにぎわいのある場所をつくることができるのでしょうか。しかし、にぎわいの場所がなくおもしろくないのに、どうして人が帰ってくるのでしょうか。こういう非常に難しい状態に陥っている、ネガティブフィードバックに陥ってしまいましたけれど、やっぱりこういう市場経済に任せてい

たら絶対にできないわけで、やはり、広い意味での地域コミュニティの形成が不可欠だということです。例えば、このにぎわいの場所ですが、南三陸町では、震災直後に10月になり初めてコンビニができましたが、夜になったら浸水してくるということでもあります。2年半たち、やっと仮設商店街が南三陸町にできましたが、これは前のコンビニ以降に比べて非常にいいわけですが、現在どうなっているかという、中心的なにぎわいの場所というので、「さんさん商店街」がつくられています。大体100メートルにわたって、木を用いた有名な建築家がデザインされました。基本的には、食べ物屋さんとお土産さんが重要ですね。ここには夜は誰も住みません。これで本当ににぎわいができるのかと、私は非常に難しいなと思っています。もう一つ比較してみました。これは陸前高田のにぎわいの中心をつくっているところですが、これはかなりうまくいっていると思います。これは市立図書館を中心とし、30ぐらいの専門店がスーパーマーケット「マイヤー」を復活しまして、「ファッションセンターしまむら」とか、「ドコモショップ」とか、ドラッグストアとか、市役所も近くにできます。一体としてお祭り広場やイベント広場も一緒につくり活性化していくと、南三陸町と違いましてかなりうまくいくかと、やっぱりここは復興すると思います。この地域のリーダー、コミュニティのリーダーというのが非常に重要だという気がします。「アバッセたかた」を主導しております商工会長の伊東さんと一緒に撮った写真でも、例えば図書館を真ん中に置いて、人、子供が集まってくる、大人もみんな学校からの帰りにここに寄って、みんなが勉強できるというような一体感を持った拠点をつくっています。我々、いいところは学んで、将来、未来に向けて伝えていくということが重要だと思います。この点に関しましても、先ほどの、非常に魅力ある広い岡本商店街がどうしてああいうふうにできたかを、今から復興するところにおいてぜひ伝えていってほしいと思っています。

また、地域の資源を最大限に利用して雇用をつくらないといけません。産業をつくらないといけません。出発点は地域資源を最大限に生かすということで、幸いにも三陸海岸の沖合というのは、暖流と寒流がぶつかって世界三大漁場の一つで、世界的に漁業資源が豊富なところ。それにリアス式海岸の「溺れ谷」は魚が育つところで、養殖にも向いていますが、

自然資源が豊富です。実際、ワカメの生産は、2015年で全国の71%、ホヤは78%です。ホヤぼーやの町でもありますが、メカジキとかが物すごい獲れ、これらを中心的な資源として復活していくということになります。資源という形のない例えば過疎地もあります。この過疎地も含めて、将来、いろいろな被災が起こるとどうやって復興に向けていくかという、基本的な考えというのは、まず一つは、今まで有史以来、これまで続けてきた人口増大時代に植えつけられた、我々の固定観念を捨て去る必要があります。これからの人口減少、超高齢化時代に確実に増える2つの根源的な資源があります。一つは、一人当たりの国土、ないし自然資源が確実にふえるということで、日本の領土を取られない限りは、国土は同じですから、人口は半分以下になれば、みんなの土地は増えます。森も山も海も全部残るため、自然資源はそのまま増えていきます。人には人生100年時代、昔は50年ですよ。これも根源的な資源であり、この2つをいかに最大限に活用しながら、多様性に富んだ地域づくり、国づくりをしていくかということだと思えます。

そこに重要なのは、日本全体の人口が減るわけで、過疎地はもっと減る。そこで、それぞれの市長さんとか町長さんが、今のまま人口を10年前に戻すとするのは完全に絵に描いた餅です。重要なのは、各地域が保有する資源を最大限に有効に活用しながら、そのもとで、豊かな生活を維持、達成できるような最適な人口規模の実現を目指して、これで人が生き生きと生きていくということだと思えます。だから、人口が目標じゃないということでもあります。

そのとき、もう一つ重要なのは、人口が減るのはもう避けようがない。じゃあ、自分の地域だけでこういう活力を増すというのはなかなか難しいわけで、自分の地域内だけじゃなしに、日本全国、世界とを含めて、重層的なネットワーク（つながり）を構築して、そのネットワークを通じて、創造的復興をしていこうということです。

それは、例えば鉄鋼の町である釜石市は非常に大きな被災を受けましたが、オープンシティ戦略ということを、今、実際に実践しています。これは、基本的には、町の人口を、わしはとにかく釜石のために頑張るんだという活動人口を増やして、もう一つは、釜石に常住していない、釜石市と

関係のある、例えば、九州の鉄鋼の町でいつも行き来がある小倉とか、北九州市とか、そういう日本のほかのいろいろな人が来ています。東京からも来ています。地域復興に参加したいというアイデアをたくさん持った人たちが日本全国にたくさんいらっしゃいます。その人たちを呼び寄せて、これには、こういう活動を援助する包容力があるわけですが、つながる人口を増やして、全体の相乗効果で復興していくというのを、釜石のオープンシティやいろいろなところでもやっているところです。

「人と人のつながり」というネットワークということで、ネットワークの理論と数学理論にストリングス・オブ・ウイーク・タイズというのがあります。日本語では「弱いきずなの強さ」。これは、相反している言葉のようですが、実際の例でお話ししたいと思います。実は、私は、この講演会のために5月17日に、岡本商店街の「気仙沼ただいん」で松田理事長とお会いいたしました。このとき、打ち合わせが終わって、彼が経営しています「アリオオ」に連れて行ってくださいます、そのとき、実は偶然、関西学院大学の常任理事の長峯先生が7時からいらっしゃる予定で、東北の被災地、復興にまた視察に行くという私に先生の話の聞いたらいいと言われ、気仙沼出身の長峯先生とお会いいたしました。ちょうどアメリカンフットボールで、日大からこっちに謝りに来たときだったため、ちょっと遅れて来られました。長峯先生とお会いしまして、私が5月末に気仙沼も含めて、三陸海岸の視察に行くと言いましたら、じゃあ、気仙沼でぜひ市長に会えと言われました。

市長に会って、そんな偉い人にどうやって会うのかと思うと、長峯先生がすぐに携帯電話取り出して、市長を呼び出して、藤田というのと二人、何か暇そうな先生が行くからぜひ会ってやってくれと言われました。私、長峯先生、何でそんなに簡単に市長に電話をかけられるんですと尋ねると、実は、同級生だということでした。私は松田さんに会うという、普通の会ってないのが会いまして、今度はそこで偶然にも長峯先生に会いまして、気仙沼出身でありまして、今度は電話をかけていただきまして、気仙沼市長に会うことができるとということで、こういう続く方に、一旦、自分の洞窟を出ますと、どんどんネットワークが広がります。市長は1時間ぐらいしかお話ができなかったのですが、復興担当者の小野寺さんにもお会い

たしまして、いろいろな復興の様子を聞くことができました。おもしろいのは、この市長に会いまして、私は、どうして長峯先生に、あそこのレストランで会ったって、ああ、2階にあるイタリアンレストランかって、市長もすぐわかってまして、何回も行かれて、この小野寺さんは、神戸に行ったことありますかって、私、神戸復興マラソンにいつも常連ですよと言われちゃって、こういうふうに、そのおかげで、気仙沼の人をずっと知ることができますけど、一旦、自分の洞窟から出て行って、このみんなで新しいネットワークをつくると、そしたら、非常に友達もできる、新しい知識も得られるということでもあります。これがストリングス・オブ・ウイーク・タイズ、要するにワールドというのはスモールということでもあります。

それから、この南三陸町の復興で、いろいろな方たちが物すごく活躍されてるわけですが、一つの例といたしまして、この南三陸町の「ホテル観洋」について、少しお話させていただこうと思います。これは、手前は完全に破壊された南三陸町です。ところが、湾を超えました、この岩盤の上に「ホテル観洋」というのがあり、これは岩盤の上でしたので、少し被災しましたが、ほとんどそのまま残りました。ここしか残ってないわけで、600人の被災者が全部ここで一緒に住みまして、工事関係者も200人、それから従業員も併せて1,000人の人がここに3カ月間、夏の終わりまで、水もない、電気もない、そこでみんなが1,000人の人が共同生活をしました。これはすごいことです。客室はありますよ。だけど、トイレは使えないですね。水がないんですからね。それでも、いろいろな食糧を分け合って、水はどうするかと、じゃあ、50キロ東のほうに行きましたらトヨタ自動車の大衡工場があり、タンクローリーで毎日水を持ってきたという。こういう形で、いろいろな助け合いで、みんなが復旧していったということです。このカモメというのは非常にかわいいのですが、「ホテル観洋」は、昨年ツーリズムアワードという、日本の観光協会が中心で出している最高のアワードをもらっております。それは、「ホテル観洋」にいる語り部による被災地の活動ということで、実際、我々が被災してさして何もするわけじゃないですが、しかし、皆さんは風化というのを、忘れられていくことを一番恐れられていまして、語り部の人が来た人に今までの経験の話していくということで、重要な役を果たし、マイクロバスをた

だでずっと案内していらっしゃるわけです。こういうことを取りまして、最後に、私が復興するたびにいつもお世話になっております「ホテル観洋」の、右から2人目のおかみさんで、きずなということをテーマに話すということで、済みませんが、きょうは、つながせてくださいということで、写真撮ったのがこれであります。

それから、やっぱり創造的復興、古い、壊れたから元に戻すじゃ、これは元気な町にはなりませんね。これをやると神戸の場合のコンテナ港はなかなかうまくいかなかったですけど、やっぱり前よりもよくするということが、言うは易くなかなか難しいことです。例えば、幾つかの例を挙げますと、南三陸町での壊れた戸倉地区でのカキ養殖、ここについてお話ししたいと思います。その前に、今、三陸海岸では、カキとかイカとかホヤとか、いろいろな養殖が非常に盛んです、ここも同じですが、養殖が始まったのは、1966年のチリ大地震の後です。それまでは、今、カキ養殖をやっている人は炭焼きとかやってらっしゃったわけで、ある意味で新しい産業をつくろうということで、それがカキ養殖で、66年のチリ地震のあと、こういうリアス式海岸の湾で養殖業を始めたのが非常にうまくいったというのが、創造的復興であります。ただ、このうまくいったから、いかだをつくってどんどん増やして、カキ養殖がどんどん増えて、若者も増え、そしたら、水が汚れて、だんだんまた取れなくなりますので、取れなくなるから、もっといかだを増やすということが起こっていたわけです。このカキ養殖のいかだですが、大きくて7メートル、10メートルぐらいで、ここにロープを10メートル下げて、カキの養殖を、種をやってやるわけです。これがどんどんふえて、震災前には10メートル間隔ぐらいになってしまった。そしたら、海が窒息して、もう酸素がなくなって、2年も3年もたっても、カキが育たないという状態になりました。というのは、震災で全部が本当に見事に、見事と言ったら非常に怒られますけど、破壊され、いかだがなくなって、初年度に100ぐらいのいかだを40メートル間隔で作って、次に200ぐらい新しくつくりました。ここに何が起こったかといいますと、新しい、非常に広い間隔で、きれいになってあらわれた海でありますと、今までは2年かかっても小さなものしかできなかったのが、1年かからない間に、すごい大きなぷっくりしたのができる。私は

食べさせていただけいましたが、一人最低10個食べないといけないのですが、10個食べたら夕食が食べられないぐらい大変です。こういう形で、戸倉地区では、200のいかだで、ずっと40メートル間隔で、前以上に生産性が上がるということがわかりました。しかし、ほっといたら、またいかだを増やせますから、どうやっていかだが増えるのを防ぐかということではありますが、コモンズの悲劇と言いましてどうやって防ぐかということですが、ASC認証を取りました。というのは、このASC認証というのは世界基準で環境に優しい漁業ということでもあります。これは非常に厳しい検査がありまして、これはいかだの間隔、40メートル以上ないといけないとか、いろいろチェックされ、それを半年か1年置きに、チェックに来ます。漁業者の労働条件もよくないといけないです。週に必ず休日を設けないといけない、こういうのも要りまして、だから、その結果何が起こったのか、漁師の生産性も上がる、労働環境もよくなって、後継者も入ってきたという、いわゆる創造的復興の一つであります。

それから、もう一つの例はSANRIKUブランドで、この広域で水産物を湧出しようということなんです。今、この日本全体、お肉を食べる人口も増えるようになって、海産物、水産物の需要が減ってきていますが、先ほども言いましたように、世界は人口がどんどん増えます。もうすぐ70億が90億ぐらいになります。増える主なところはイスラム教の国々やいろいろな産児制限のないところ。日本も中国の需要も取り込むことが重要ですが、イスラム教の国、アジアではインドネシアとか中近東、将来はアフリカにも輸出していこうというSANRIKUブランドで、3つの県が一緒になってやろうというので、ちょっと余談になりますが、昔、唐桑御殿というのが気仙沼の東の海岸のほうに唐桑半島というのがありまして、そのつけ根に唐桑御殿という、お城みたいな豪邸がたくさん建っております。これはいつ建ったかといいますと、40年前です。なぜかという、40年前ごろに遠洋船がカツオ、マグロの遠洋漁業にいき、太平洋沖で半年、あと、インド洋に行って半年とか、世界1年間ぐらい回るわけで、船に乗る人の給料はすごく高いので使い道がない。だから、これを兄弟で2回か3回やったら、もうこれが建つわけです。ただ、それは、次男、三男、四男と昔の人口の多かったときに船乗りになったわけですが、今は次男、

三男がいないですから、誰も遠洋漁業船に乗ってくれない。誰が乗っているかといったら、主にインドネシアの人が多いです。これは、先ほど言いましたように、インド洋に行ったときの帰りに寄ったとかいうそういう理由があると思います。こういうのは、メカジキとか魚を大量に揚げてきます。奥にあるのはサメです。サメのフカヒレを取った後、うまく魚肉ソーセージにして、お肉のソーセージは輸出できないイスラム国に輸出しているということで、新しい商品をつくっているのが、SANRIKUブランドの一つの活動です。新しいということで、丸い日の丸に右側が欠けていますね。これ、三陸海岸のギザギザです。新しい商品をつくって、イスラム国だけではなく、世界中に輸出しているという創造的復興を中心的にやっている阿部長商店の広田さんと一緒に写真を撮らせてもらったのが右です。

それで、こういうことには、もう一つ、今まで3つの都市を南三陸、陸前高田、それから気仙沼で説明しましたが、それぞれの町の人口が減るわけで、やっぱりワンセットでいろいろな公共サービスとか、学校とか、病院とか、大きなショッピングセンターというのをつくることのできないというので、今まで気仙沼、それから、大きな産業クラスターですが、南三陸、陸前高田がある程度ばらばらだったのですが、これはそれぞれの地域間分業、いろいろな産業も分業、いろいろな公共施設のすみ分け、こういう形で学校もすみ分け、こういう広域的な連携で幾つかの町が一体になって、連携で集積力を増していくということが一つの方向だと思います。

中国の盛唐の詩人で有名な杜甫に「国破れて、山河あり」という有名な詩があります。今、過疎地の進む日本の現状っていうのは、「人減って、山河あり」となっています。ただ、山河ばかりじゃない、海も山もいろいろなのがあります。空き地もあります。だから、今、「人減って、豊かな資源あり」というのが私から言えば、地方の状況だと思います。

ところで、地域資源とは何かというのをごく簡単に説明します。宇治市の私が住んでいる家の前に来るごみの収集車ですが、「地域資源」とは何かというのは、要点はここに書いてある「捨てればごみ、生かせば資源」ということだと思います。東京大学の佐藤さんの言葉を少しいただきますと、資源を物自体と捉える考え方からは自分の地域が発展しないのは、資

源がないからだという言いわけは正当化されない。裏を返せば、そこにあるものを見ようとしなないということでもあります。地域の下地には創造的な心の働きあるのだということでもあります。これを、有名な、私がよく例に使う、葉っぱをお札に変えたという、徳島県の山奥にある有名な「いろどり」事業を皆さん聞かれたと思いますが、こういう山奥にどんどん行きますと、谷底に小さな町があり、大学を卒業して、そこに30年くらい前の1980年からいらっしゃったのが、今は彼が中心的になって始められたいろいろな活動でありますけど、今は頭がちょっと薄くなってしまっているんですけど、まあ、物事を達成するにはこれくらい時間かかるということです。何をやられたかといいますと、「いろどり」事業、これは横石さんが4人の主婦と始めまして、季節ごとに400種類ぐらいの「つまもの」をパックして、全国の高級料亭に出していく。それで、全国の、東京、大阪を含めて、占有率が約80%です。農家の人180人、土地がないとできないです。平均年齢73歳で、最長年齢者は94歳、女性が大部分です。一人当たりの収入は163万円、夫婦でやっておられますから、大体300万ですけど、余分に農業のほかにも入るということで、これは大きな収入ですよ。これ使い道がなくて、孫にやっとなという感じですけど、「つまもの」というのは、ササの葉をこういうふうにてんぷらに使おう、稲の葉を、桜の葉を吸い物に使おう、カエデを吸い物に使おうと、94歳のこの中野おばあちゃん、脚立に乗ってるということは、これは大変なことであります。私も庭木で時々もっと低いのに乗っていますが、怖いですよ。皆さん94歳になってできますかね。重要なのは、高齢化率が54%、県内1位、日本でも屈指ですが、「いろどり」以外でみんな何かに参加しています。上勝町というのは、徳島県で高齢化率が54.4%で最高、全国は26%ですから倍以上です。ところが、一人当たりの医療費は全国の34万円に比べますと、33.8万円と低いです。将来40%に高齢化率になるとと思いますが、こういうふうにならぬ形で全員が主役で頑張っていれば、こういうふうにならぬ医療費も要らないで、みんな非常に長生きできて、町が活性化できるということです。

最後に、横石さんの、これはすばらしい言葉で、「本当に地域資源というのは無限にあるよね。夕日がきれいに見えるというだけでも地域資源な

んやね。自分の住んでいるところが嫌だ、おもしろくないという気持ちが
あったら、絶対に地域資源が開発されたり、発見することはないよね。自
分の住んでいるところがいいなという気持ちがあったら、何かが発見される
もんやね」。これ、すごい含蓄のある言葉だと思います。実際は、もう東
北のほうもいろいろなところも、先ほど言いました地域資源で復興すると
いうことで、これをカモメと朝日で地域資源というのが、この大きな三陸
と思いますが、ただ朝日というのは、私、朝日新聞の社旗のように、こう
なっているかと思って、なかなかそうは映らないですけど。この朝日を本
当に使おうというのが、大きな震災を受けた女川町のまちおこしもありま
す。この大きな被災を受けましたところに、復興広場というのをつくって
いますが、この中心の通りは太平洋に向かっていまして、この行先は1月
元旦に朝日が出る場所です。これCGでやっていますが、このおかげで、
この朝日を見ようということで、この元旦の1週間前は、この町のホテル
も宿屋さんは完全にパンクしています。一つだけ最後に、ひよっこりひよ
うたん島と、これでまちおこしというのが岩手県の大槌町です。蓬莱島で
すが、このひよっこりひょうたん島っておもしろい名前ですね。このひよ
っこりひょうたん島の人形劇は1964年、オリンピックの年に始まって、
皆さんがもっともっと若くて、皆さんも若いですけど、そういうオリンピ
ックの年の65年から始まって、130,600回ぐらい続いたんですかね。
とにかく、ひよっこりひょうたん島は、ご存じのように、例えば、定刻、
昼になりますとね、大槌町全体で物すごい大きなスピーカーでひよっこり
ひょうたん島の歌が流れますよ。ひよっこりひょうたん島って大音響で、
これでやめようと思いますけど、このひよっこりひょうたん島、ある日、
サンダース先生という美人の先生とひよっこりひょうたん島に生徒5人が
遠足に来ましたが、火山活動で爆発が起こり、ひよっこりひょうたん島が
陸地から切り離され、太平洋を漂流したというストーリーです。サンダー
ス先生を中心にして、子供たちが一体となって、いろいろな新しい経験を
して、みんな成長していったというものでした。

私、本当は音痴ですから人の前では絶対歌は歌わないんですけど、今日、
特別サービスというか、特別に我慢していただいて、歌を歌わせてもら
います。皆さんも若いとき見られた方はぜひ一緒に歌ってください。途中

から入りまして、「丸い地球の水平線に、何かがきっと待っている、苦しいこともあるだろさ、悲しいこともあるだろさ、だけど僕らはくじけない、泣くのは嫌だ、笑っちゃおう、進め、ひょっこりひょうたん島、ひょっこりひょうたん島」

ご清聴ありがとうございました。

○稲田所長 第1部の藤田先生の基調講演が終わり、皆様方もその内容にうっとりされたと思います。今日の講演会は2部から成っており、1部は藤田先生の基調講演で、タイトルは「神戸と三陸を結ぶ復興ネットワーク」でございました。その中の言葉の端々に出ておりました岡本商店街の復興組合の理事長松田朗さんに後半登場していただき、お二人に語っていただきたいと思っております。

先ほどの藤田先生の講演にありましたように、東北被災地の地震後の人口減少に対して、住民票上の人口増加を目標とした復興政策というのは絵に描いた餅であるという話がございました。人口減少は確かに厳しいわけですが、逆転の発想となる2つのポイントが出たと思います。被災地における活力あるまちづくりがこれから重要になってくるわけです。先ほどの先生の講演にありましたように、つながり人口であるとか、ネットワーク人口の拡大を図ることが不可欠だということです。

今日のような人口減少下、人口増加が望めないという条件が与えられたなか、繰り返し天災はやってくる。しかし、復興支援が必要となるなか、それが持続可能になるために何が必要かということで、後半は、松田さんに現場からのリアルな発信をしてもらおうと思っております。将来、日本で起こる大規模な震災からの復興につきまして、阪神・淡路大震災や東日本大震災からの復興経験を踏まえて、どのような状況、枠づくりが望ましいのかを、岡本商店街の復興組合の理事長松田朗様にお聞きいたします。新聞にも随分出ておりましたが、東日本大震災発生直後から、岡本商店街は、三陸、具体的には、宮城県の気仙沼復興支援を行ってこられました。この間の事情を、何で気仙沼なのかも含めて、現場でやっておられたところをお話したいと思っております。よろしく申し上げます。



○松田理事長　　岡本商店街理事長の松田と申します。藤田先生、よろしくお願ひします。

経歴が違い過ぎて、しょぼいんですが、同じようなことをやってる、偶然こんなものやってるだけなので、申しわけないです。

まず、ちょっとスライドを見てもらいなごらんかな。3月11日、震災起こった日はですね、岡本商店街のホールで、我々ツイキャスという、いろいろ動画配信をするというのをやっていたので、ツイキャスの配信とツイッターの、その書き込みの仕方みたいな講習会をやりました。ちょうどその時間にやってたんですが、ツイキャスの横にツイッターの書き込みがあり、リアルタイムでいろいろな人の話が入ってくるわけですが、遠くに住んでる人も来るので、東京の知り合いがそのタイムラインに、すごい揺れたとか、もうめちゃくちゃ揺れて怖いだとかいう書き込みがあって、岡本は、そのとき、皆さんご存じのように、多少揺れもせん程度な、ちょっと目まいする程度を感じがあったので、我々、気にもかけずに進めていたらですね、その書き込みから我々は震災をしりました。こんなんやっとなる場合ちゃうなということで、それは終えて、ニュースを見たりしたということですね。その日、僕とこの店に来たお客さんたちで、何かせなあかんとか、どないしたらええかというのを考え出した。とりあえず、何かせないかんのも決まってるんですけども、募金って、我々、阪神大震災で受けた立場でいくと、いろいろな募金がありましたよ、というけれども、ちっとも何か自分とこに役立ってへん感じがしたので、違う形の支援をし

ようということが、そのときの話し合いなどで決まりました。お金送っても、お金って宙に浮いたら終わりなので、違うこと、持続するような支援をしましょう。ここに書き忘れていたんですが、もうそのときに阪神大震災のときより、もっと復興に時間かかるであろうという予想をしていました。これはその日だけじゃないんですけどね、しばらく皆さんで話し合いをしてるうちに、きっと我々も2年後ぐらいには大変な時期が来たと。2年ぐらいは、いろいろな工事の人とか来て、結構景気いい時期があったんですけど、2年ぐらいして、大体そんなんが終わると、皆さん去ってしまって、店はできたけどお客さんおらんみたいな状況になったと。それが2年後ぐらいだったのかと自分たちの実感では思うんですが、東北ではもっと、5年や10年かかるんちゃうかなと。今、みんなで盛り上がって、何か支援せないかん言うてるけど、そのころになると忘れるんじゃないかなというのがあったので、続けて行くにはどうしたらいいかというのを工夫しよう。これを第一に考えようということをしました。

初め、子供を預かろうと思ったんですが、東北の人って親戚が多いのと、東北の人って何か関西怖いとかみたいなイメージがあったみたいですけど、よう来はりましたよね。大阪弁怖いとか、何かそんなとこ行きたくない、名古屋までかな、みたいな印象があったので、きっと、ようけお亡くなりになったので、被災されて孤児の方がおられるやろうから、町で育てて、町全体で父親になって、両親になって育てていったらいいかなと思ってやっていたんですが、誰も来んかったんで、これはポシャりました。

とりあえず行こうということになりまして、被災地に行くときには、県とか市とかからいろいろなバス代の助成とかあったので、そんなんをまずいただいて行きましょうと。ちょうど1,000キロあるんですよ。バスで行って15時間ぐらいかかるわけですよ。それで、晩の7時ぐらいに出て翌朝着くみたいな感じで行きました。こんな感じでしたので、もうくちやくちやくったんで、一番、僕、今でも覚えているのは、何か魚臭かった感じかな。何か、干物が腐ったみたいなにおいが町じゅうにずっとしてて、これ、僕行ったのが6月の17日ぐらいだったんですけども、そんな感じでした。一応、服とか持っていかなあかんなど、皆さんから集めて持って行ったんですが、ここでちょっとおもしろいのが、左側のほうを見てもら

ったらわかると思うんですが、人がきれいに並んでるじゃないですか。これ、大阪やったら、何かそんな並ぶの嫌やって、我先に服をバーンと持って行って終わりみたいな感じするんですけども、東北の人ってめちゃくちゃ控え目なんで、きっちり並んで待ちはるわけですよ。さあ、いいですよ言うてから、順番に服を、前から順番に列も乱さず取っていくと。このとき、僕は初めて東北の人、すごい謙虚さと控え目さというのを、すごい実感した感じがしました。これは、後にもいろいろつながるんですが、東北の人、そういう何か謙虚さという気性が、いろいろ復興を妨げる部分もあるんじゃないかなという気もしました。何で気仙沼やいうのはですね。兵庫県の県庁に聞いたんです、何か支援したいねんけど、どっかないですかと。そんなら、関西は宮城県やって、宮城県に電話したら、じゃあ、気仙沼やってよみたいになって、気仙沼に電話したら、気仙沼の商工会議所を紹介していただいて、その所長を訪ねて、いきなり行ったというのが、だから、この左の写真、いろいろ話してるみたいに見えるんだけど、おまえら何しに来てんみたいなのがあるかもしれないですけど、写真には言葉が出ないので伝わらないかもしれないですけど、何困ってますかとか、そんなんを聞いたりですね、そんなことをして帰ってきました。

これが2回目ですね。1回目終わってから、何が足りんのかなというのがあったんで、気仙沼をネットで調べてみると、岡本商店街が復興支援で行ったというのが、まず出てきたりするわけですよ。その被災地であるということ以外は、そんなんしか出てこないの、ほかにももっと何か発信せないかんのちゃうんかな、というのがあったので、じゃあ、ルーターを持って行って、気仙沼の人にフェイスブックのアカウントを取ってもらおう。アカウントを取れば、いろいろな人の生の気持ちとかが我々知ることができるんじゃないかと。つながりやつながったで、それを我々生かして、その時々に必要な支援ができるんじゃないかなと思って、無理やり行って、道行く人をつかまえて、フェイスブックのアカウントを取りませんか言うて、10人ぐらいが取っていったんですよ。それでまあまあ、皆さん、それで発信し出して、つながっていった、というのがありました。このときすごく感じたのは、その次の年の3月11日、みのもんとかが、3月11日から、みんなを元気づけようとして、何かステージつくっていろいろした

んですけども、フェイスブックの僕のタイムライン上を見ると、やっぱり鎮魂の日なので、どの人も知り合いがいっぱい死んでるので、今日ぐらい静かにさせてよという声がよくあったので、ああ、やっぱりそういうことを考えるんだなというのをすごく感じたので、そういう意味でこのフェイスブックで神戸の連中でみんなで見ながら、向こうの人の気持ちを推しはかりながら支援活動をしましょうということが、考えていったという感じですね。

そうですね、その後、翌年にですね、経済産業局が気仙沼の商店街が他の地域の商店街と組んで何かをする場合、1,000万円までの補助をしましょうと、じゃあ、それもらって何かしようよというので、気仙沼でも何かするのとともに、神戸で何か売りましょうと。向こうでも全然物売れないので、神戸へ持ってきて物売ったらみんな助かるんちゃうのとか、東北の商品なかなか関西に入ってきてなかったの、例えば、南蛮漬けて皆さん思い浮かべるいうたら、魚に衣つけて揚げて、酢につけて食べるみたいな感じでしょう。気仙沼では、南蛮漬けというのは、ちょっとピリ辛のしょうゆ風味の味つけをして焼いて食べるという全然違う文化があったりするわけですよ。そういうのも持って来るのがおもしろだろうというので、南京町の商店街の方に協力していただいて、春節祭のときに、1週間ほどめっちゃ寒いところでサンマを売ったりしたわけですよ。これがその初めです。その助成金を書くときの、いろいろな書類の書き方とかそんなのも支援のうちかなと思って一緒に提出に行ったりですね、その1,000万のうち、何ぼか後にきて、それをやりました。

ほかのことで、先ほどの藤田先生のプレゼンにもあったように、モンローワールの1階のところ、大家さんに家賃3分の2にまけてもらって、それで気仙沼支援ショップというのをやりました。これは初めてなんですね。店員さんには、福島から宝塚に避難してきてる人を雇って、北区にも避難してきてる人がいて、その人もアルバイトで雇って、やったんかな。向こうの人ってやっぱり、避難してきてる人の雇用も確保せないかんというので、そういう感じでやり始めました。1日目めちゃくちゃ売れましたけども、これ毎日売れたらえらいことやない感じぐらいで、次は、だんだんしょぼくなっていくんですけども、そういうのを行って神戸の人にいろいろ

る買ってもらって、気仙沼のいいところを知ってもらおうというのをやりました。

質問ですね、何で気仙沼やねんというのと、こんな感じの事情で取り組んできたというのは、こういう感じの質問の答えになりますでしょうか。

○稲田所長 ありがとうございます。よくわかりました。

今のお話ですと、発信ということがとても大事だというのはよくわかりました。次にお聞きしたいのですが、さっき、支援金を持って行ったら、それで終わりという説明がありました。それが生かせる形といいますか、支援が実効的、すなわち事業が持続可能となるためには、経験からしてどんなことが重要とか、何を重視されてるのか、そのあたりを、もしお話ししていただければありがたいと存じます。

○松田理事長 済みません。キーは友達になれば続くという話をみんなとしとったんですよ。だから、お友達になってしまいましょう。そのためには会わないかんで、みんなで大体10回ぐらい、神戸市や兵庫県やの補助金もらいながら、バス出して行きました。15時間かけて行って、15時間かけて帰るわけですよ。金曜日の、皆さん会社終わった日の7時ぐらいに集まって、出発して、翌日の朝、向こうに着いて、10時間ぐらい活動して、また、向こう出て、こっちに朝5時ぐらいに着いて、はい、行ってきますって、そのまま会社に行く。やっぱりみんな仲よくなるわけですよ。それでどんなことが起こったかというのと、これは、そのもっと後やな、何かそのとき知り合った人が甲子園ボウルで、決勝のときのハーフタイムショーで気仙沼の支援を何かしたいというのがあったので、先ほどの長峯先生に、気仙沼の人を紹介していただいて、気仙沼のことを言うてもらおうとかそんなんをしたりとかですね。

これはですね、気仙沼の新中央商店会の副理事長をやってはる、三浦さんなんですが、ビートラスというビートルズのコピーバンドやってはって、それを毎年岡本商店街のそのサマーフェスティバルにお呼びして、一番ようけお客さん集めるぐらいの大人気になってますね。こういうのをやったりですね、これもやっぱり来ることによってつながりが失われないという

ことが、やっぱり生でね、しゃべったり、お話を聞いたりする、このときもライブコンサートの前にいつも5分ぐらいなんですけども、気仙沼の現状をこんなんですよいうのをしゃべってもらう、いうのをしています。

これはですね、バスで行って仲よくなった人たちが、女子と言っているのかわからないですが、女子会と称して、こっちから10人近く行って、現地の方々と一緒に、ただ飲むんですけども、行ったら行ったで、やっぱり忘れられてないというのが皆さん感じられて、すごく喜んでくれると。これ、年にね、1、2回皆さん行っておられます。

ツタエテガミプロジェクトいうのをやっている連中がいて、これはね、宛て先がわからずに手紙を書いて出す。現地の人を被災地の人とか、そのころは、何や避難所とかの人に配るわけですよ。何か感じたら返事が返ってきて、そこから、手紙のやりとりが始まると。こういうのをやっています。それが、やっぱりまだ続いてて、いまだにやっぱり手紙のやりとりされる方が数多くおられます。そういう活動に発展したりもしているという感じですね。

大体いろいろあるんですが、商店街自体では、大島のカキを、有名なカキありますよね、森がカキを育てるんだ、畠山さんがNHKで出たりしてたもんですね。おいしいカキがあつて、そのカキを買ってきて、まず、だしとって、カキしょうゆをつくったりしました。これ、湯浅醤油と一緒にやったんですけど、これも写真も、ごめんなさい、ここまでしかないんですけど。その残りのだしとかカレーに使って、今度はカキカレーをつくって、それめちゃくちゃおいしかったんですが、ここで問題が出たのが、気仙沼がカキを出荷するときに、そのまま殻ごと出荷することが多く、むき身を出して工業製品用の材料として出すときには、エックス検査というのが大体必要なんです。かんで歯折れたらあかんじゃないですか。ほんならエックス検査をしていなければ、そのカキは材料としては入荷できないとか、納入できないカキかな。なので、おいしいカキカレーはできる算段はついてるんですが、そこにエックス検査機、これね、二、三百万しよるわけですよ。そういうことで、気仙沼で備えつけないとこがないので、それができないな、いうので、まだそこがとまったとこがあつたりですね。気仙沼の大島で、北限のゆず、ゆずを栽培してはるんですけども、そこに自

然栽培の研究者を連れて行って栽培指導をしてもらったり、寒さに強いレモンとかを持って行って、気仙沼のレモンができると、日本でも北限となるので、そういうレモンで値打ちをつけて売ることができるんじゃないかとか、そういう支援をしたりですね、気仙沼のサメの皮を持ってきて、革製品をつくっているグループがいたり、桑の実をこっちにもってきて、マルベリーという名前で売り出すというグループがいたりですね。あとは、兵庫県のいろいろな、篠山市や加西市、三田や芦屋、神戸まつりのうはらまつり、それから、上川町の夏祭りなどに我々が出展させてもらって、気仙沼のものを売りに行きました。それによって、売り上げに協力できるので、そういうことをいまだに続けてます。向こうの物を持ってきて、仲よくなることによって持続さすというのは、そういうことなのかなと。やっぱり藤田先生のように理論的にきっちり検証して、それでやろうというんじゃないなくて、我々はやってみて、やれば残して、あかんかったらやめるという感じでいろいろやっていくんですが、残ってるのはこういう感じなので、やっぱり人つないでいたら、そこでいろいろ広がっていくなというのを実感してます。今回、藤田先生が長峯先生とつながって、市長らと会えたかいうのも、やっぱり人間つながっていると、いろいろそういうことが起こるのだなというのを実感した次第でございます。

以上です。

○稲田所長　　とにかく、みんな仲よくなって、そして時間をかけてしっかりつなげ、続けていくというのが、成功の秘訣かなというような感じがしました。前半の部分で藤田先生が示されたネットワークづくりの具体例が、松田さんが言われたところであるようです。最初の機会がツイッターで発信しつながるというのが、今であれば当たり前かもしれないですけど、それをうまく利用されてきたという気がするんですが、振り返って見てやっぱりそういうことでしょうか。

○松田理事長　　商売で、店の箱とお客さんの人間というつながりじゃなくて、店の中の人とお客さんの人というつながりにしていけば長続きするじゃないですか。箱とお客さんの関係だったら、なかなか、そのお店とい

う箱はどこでもあるんであれば、よその店行っても一緒みたいな感じになるので、人間いうのはね、ほかに変えようがないので、そのつながりをきっちりつくって商売やっていくというのは、岡本商店街で皆さんにやっていいことが自分らからやってきたとか、お客さんのおったときのつかみ方からそういう商売のやり方をやっていかんと、まず、残っていかないなどというのが感じてるところです。

○稲田所長　なるほど、わかりました。ありがとうございます。

○松田理事長　ああ、そうか、そうか。そやから発信、だから結局ネットでの発信いうのは、人間と人間をつなぐじゃないですか。それを利用したかんと、お店もうまいこといかんねんな。被災地支援にもそれを利用したということです。

○稲田所長　わかりました。確かに、距離はあるけれども、空間通じてちゃんとつながっていると、これが大事ということですね。

藤田先生に質問ですが、例えば、スライドですすね、南三陸と「アバッセたかた」の2つの例を示されて、先生は後者を発展形態みたいでおもしろいですよと紹介されたと思うんですが、ここをもう少し解説していただけないでしょうか。今後考える上で何が重要なのかとかですね。

○藤田教授　どうもありがとうございます。

今、私に質問していただいたのですが、実は、私が松田さんに質問したいことです。この阪神・淡路大震災から、もちろん岡本も大きく被災しまして、例えば、私は岡本は非常にすばらしい商店街、一つはいろいろな仕掛けがあると思いますが、いろいろな多様性があるというときに、統一感というの、例えばですよ、石畳がどこに行ってもあるというのは日本になかなかないですよ。やっぱりコンクリで舗装されてる南三陸地方のような感じの、何か人間味というか、また来たいというの、来られないわけです。どうして、こういう阪神・淡路大震災から岡本商店街を復興するとき、石畳にしてとか、いろいろな工夫をやられたと思うんですけど、そこ

のところを説明していただきたい。私がお願いしたいのは、いろいろな被災地を見てみまして、先ほども申しましたように、今までにぎわいというのは自然とできていて、できるところ、今はシャッター街とかでうまくいってないんですけど、実際被災地はもっと悪い条件だろうけど、そこに本当ににぎわいを取り戻して、みんな遠くに行ってる人も帰ってきて、この後、このにぎわいをつくらなきゃいけないんだけど、それに対して、私は岡本商店街の今までの経験というのをもとに非常に重要なアドバイスができると思います。その辺も含めまして、阪神大震災からの岡本の復興と、それから、気仙沼のように新しい壊れた町をどうやって復興するって、どうというような助言をしたいというようなことがありましたら、ぜひ教えてほしいです。

○稲田所長　松田さんの目から見て復興について何が大事でしょうか。藤田先生の質問に、もし答えていただけたらありがたい。

○藤田教授　できましたら、全国の話もしていただけると。

○松田理事長　そうですね、岡本の多様性とかいうのは、もう、1本の通りの商店街がないから多様性が生まれたのかなとか、阪神大震災のときに、そんなにめちゃくちゃつぶれたりしてないので、古い建物があり、古い建物があると、賃料も安いのでおもしろい商売も成り立つやないかとか、まあ、そんなんがあったのかなと思います。先ほど藤田先生が言われた、全国の話をこうごちゃごちゃいろいろな店がまじってるのが必要であるとか、あと、いい町の4条件ですよ。道が細かく入り乱れてるのが必要であるとか、古い建物があると多様性が保たれやすいとか、人口密度が高くないと、みんなやっついていかれへん、それ必要というのは今ありますよね。この4つは岡本には、今のところ備わってるのかなと思うのですが、3番目のその、賃料安い建物がだんだんなくなって、建てかえによる賃料の高騰というのが岡本は今キープしてるところではあったんですね。多様性が損なわれる可能性もあるのかなという気もするので、それをどないしたらいいのか考えてるところです。石畳は1999年に阪神大震災の後、やっぱりど

っからどこまでが岡本商店街とか、上にアーケードとかつける時代ではなくなっただけで、じゃあ、下にしましょうというので、石畳にしたというのが経緯です。大体3億かけて、その4分の1は自己負担で、それを20年償還で返していったというのが我々がやったことです。言うたらね、そのとき僕、理事でなかったんで、我々の先人たちがきっちりやったというのを引き継いでいるということですね。被災地にはにぎわいが自然と生まれるんじゃないんで、もっと悪い条件があるんですが、人が歩き出すのが大事なのかなという気がしました。そうですね、車で去ったらみんな買い物せえへん。岡本駅前がロータリーになって車が乗り入れると、そのまま人が去るので、買い物する人が減るんじゃないかな。なので、被災地でにぎわいを取り戻すには、車の流入を無理やりやめて、周りに駐車場があつて、人が歩くようにすると、歩く道の横には商売のチャンスがあるのかな。昔、阪急の梅田駅で、僕、子供のとき、もうちょっと南までありましたよね。阪急百貨店の横、大きな通りをこっちに後退させて、人歩くようになって、阪急百貨店はめちゃくちゃはやったとか、人間を歩かすことによって、商売のチャンスがもっと生まれるんじゃないかと。不可能なんですけど、皆さん、岡本の町知っておられるんですけども、町の中、例えば、5、6時間、車の流入を全部とめてしまつて、周辺の駐車場にとめて、人が歩くようになるとですね、今まで商売のチャンスなかったような路地にもお店ができていって、その人も商売のチャンスできるんじゃないかなという気がするんで、被災地でにぎわいを取り戻すという中で、便利を考えるのであれば、神戸でも長田とか道を広げて、車の通りをよくするいうのを、ただ楽ね、何か消防車入りやすいとか、そんなんありますよね。でも、なるべく車の流入をとめる考え方も必要なのかなというのを思ったりします。拙い意見で申しわけないですけど、終わりです。

○藤田教授　　実際、私も自分で責任を感じてるんですけど、被災地が本当に今から、このにぎわいを持って楽しい場にならないと、人は帰ってくれない。だけど、それをいかにして達成するかというのは、本当は我々、都市経済学者とか、こういう地域経済学者、土木の土木計画の人もそれこそ本気で考えて、実際に現地に行って、今までの自分たちの経験から、い

ろいろな現地の人たちと話し合いながら、いろいろなアドバイスしたり、また、自分の勉強になる。こういう現地に入り込むということを、もっと我々学者というか、学生も一緒にもっとやるべきだなということを私自身が反省しております。これは、被災地の陸前高田の人は、それまでは普通の市役所の業務をやってらっしゃったわけで、すごい忙しいわけですよ。ところが、被災した後、業務は10倍ぐらいふえるわけですよ。今まで全くしたことのない、まず、土地の検査から所有者から、盛り土から町の復興の案をつくるとか、同じ人がやらなきゃいけない。いろいろな支援がありますけど、これはほとんど人に、それぞれ市役所にスーパーマンになれと要求してるわけで、そうじゃなくて、やっぱりそういうときは、我々いろいろなほかのいろいろな自治体もそうですけど、多く参加しましたが、我々学者も行って参加して、同時に勉強しながら、この学んだことを次の、今から起こりますから、日本は、そこに伝えていくということを、我々は本気で考えていかなきゃいけないと思ってます。それから、幾度も話せば切りがないんですけど、例えば、やっぱり、先ほど、人間というのは自分の地域のとか、自分の同級生とか、何か狭い洞窟では未知なネットワークもってるわけですけど、だけど、それは幾ら飲み会を何回、10回、20回やったって、大して賢くならないわけで、やっぱり自分のこの狭い洞窟から、これを一挙に出てみて、ほかの洞窟に行ってみると、これが非常にストリングス・オブ・ウイーク・タイズということだと思います。それで、本当に顔が見えると、友達になるということで、また行こうかと、またこういう人間関係ができる。だから、洞窟を出て、日本のいろいろな被災地だけでなしに、いろいろなところに友達関係をつくって行って、これをお互いに、新しいアイデアをこういう勉強し合うということ、これはもう、日本のあらゆる地域が今からやっていかなきゃいけないと思いますね。

それから、もう一つ、日本では、日本は人口減少するというけど、日本の人口は、例えば、2100年に5,000万になったとしてもね5,000万の人口というのは本当は大きいんですよ。今、2016年で世界のGDPのトップの国を集めてみますとね、アメリカとオーストラリアを除いたらですね、全部北欧の小さな国なんですよ。一番リッチな国がルクセン

ブルクで50万ですよ。アイスランドというのは30万の都市で、日本の島根県だって60万ぐらいありますからね。日本の一つの県というのは、こういう神戸なんかはもう香港と太刀打ちできるぐらいのものなんですけど、本当は北欧の国々がどうしてあれだけ活躍して発展してるか、これはやっぱり、一つは、5カ国語、みんな5カ国語ぐらい話すというのがありますね。ネットワークが世界に広がっているわけですよ。やっぱり我々もそれぞれの地域はネットワークを、ほかの地域、それから世界に広げていくと、これがまた不可欠のような気がします。

○稲田所長 ありがとうございます。

やはり、コミュニケーションをうまく取っていくことが大事ということですね。それから、先生が言われたように、“シマ”から抜け出るという話もとても大事。それから、シェアライドの話があって、ああいう発想もこれからを考えるととても大事かなというふうに思っております。

実は、松田理事長には、非常によく協力していただいております。大学のオープンキャンパスのときに、岡本の商店街にはいろいろなイベントをしていただいて、まずは、学生の受け入れ、そして親御さんに岡本を知ってもらおうというようなことを少しずつやってまして、それが定着してきたと思います。

時間も過ぎましたので、今回の講演会をこれで終わらせていただきます。最後に、本当に講師の先生方に、もう一度拍手で終わりたいと思います。よろしく申し上げます。